



上

71年前の12月8日、日本はアメリカとイギリスなどを相手に太平洋戦争をはじめました。みなさんと同じ年ごろで戦争を体験した、体の不自由な子どもたちの疎開生活を紹介します。【木村葉子】

光明学校（現在の東京都立光明特別支援学校―世田谷区）は、全国初の体が不自由な子のために学校として、今から80年前に当時の麻布区（現在の港区）に設立されました。他の小学校と同じような勉強のほか、整形外科医の指導のもと、最新の医療機器での治療やリハビリなどが行わ

れました。

当時は今のように体の不自由な人々への理解が進んでおらず、子どもや家族に対するひどい差別や、子ども同士の間柄が嫌がらせがありました。体の不自由な子が、

空襲のある東京で集団生活

がいてしたが、一般の学校は「軍事教練」があったため通えませんでした。軍事教練とは将来兵士になった時に役立つように、軍隊式の行動を訓練することです。

太平洋戦争末期になると、本土空

家の座敷牢に閉じ込められていることが珍しくなく、「光明学校に通えた子どもは、恵まれていた」と、卒業生は話します。

●「戦力外」と疎開できず

光明学校の子どもの多くは、ポリオ（ウイルスによる急性伝染病）やカリエス（骨が結核菌に侵される病気）などの病気が原因で、手足が不自由になりました。比較的軽度な障



光明学校の子どもの多くは、ポリオ（ウイルスによる急性伝染病）やカリエス（骨が結核菌に侵される病気）などの病気が原因で、手足が不自由になりました。比較的軽度な障

もありました。しかし、体が不自由なために「戦力外」と考えられた光明学校の子どもたちは、学童疎開から外されました。空襲で危険な東京に、残らざるを得なかったのです。

＝2面につづく

襲がはじまりました。1944年6月から、政府は大都市の子どもたちを学校ごと田舎へ移動させる集団学童疎開を進めました。子どもたちの命を守ることが目的でしたが、そこには次世代の戦力を確保するねらい



13

東京都立光明特別支援学校(世田谷区)の創立80年を祝う講演会が1日、国立オリンピック記念青少年総合センター(東京都渋谷区)で開かれました。講演会のテーマは、1945年5月に始まった同校(当時の光明学校)の児童疎開です。疎開した2人の卒業生と、子どもたちを受け入れた上山田ホテル(長野県千曲市)の現在のおかみが体験などを話しました。

【木村葉子、写真も】

光明学校に通っていた体の不自由な子どもたちは、大都市の子どものほとんどが地方へ移り住んでもなかなか



光明学校の卒業生の秋山孝さん(左)は、上山田ホテルに疎開した一人です。講演の前、ホテルの現在のおかみ・若林和子さんと楽しそうに話していました

忘れられない疎開とリンゴの味

疎開できませんでした。上山田ホテルに疎開ができたのは、終戦のわずか3か月前。子どもたちが疎開した10日後には、空襲で世田谷の校舎のほとんどが焼けました。

一般の国民学校は校舎が焼けて

も、別の学校などで授業を再開できました。集団疎開は、46年春ごろまでには終わりました。しかし光明学校の疎開は終わらせませんでした。体が不自由な子どもたちの教育に必要な代わりの施設がなく、学校再建も

開に参加した秋山孝さん(80)は、疎開先での生活を振り返りました。ホテルの大広間は、勉強と生活の場でした。午前中は勉強し、午後には歩行訓練のために町や近くの千曲川へ散歩に行ったそうです。

進まなかったからです。疎開は49年5月まで、4年間も続きました。

●施設なく、食料も乏しく…

光明学校の高等科1年生で学童疎

食料事情は悪く、先生と凶鑑を見ながら、アカザやセリなど食べられる野草を摘みました。イモは実だけでなく、茎もたいて皮をはいで食べました。食べ物を入れてもらいに、リヤカーを引いて近くの農家へ先生たちと出掛けたこともあります。その時わけてもらったリンゴは、「これまでの80年間の人生で、忘れられないおいしさだった」そうです。

—2面につづく



1面からつづく



光明学校の疎開を研究する、同校元教諭の松本昌介さんは、講演会を主催した一人です

温かく迎えた地元の人たち



疎開体験を語る 袋井徳さん

どは、食べ物をお届けしてくれました。当時ホテルの主人だった若林正春さん(故人)は、松葉づえや金属製の器具のために畳や

ふすまがぼろぼろになっても、文句一つ言わず4年間、子どもたちを預かりました。

● 畳ぼろぼろ 文句一つ言わず

上山田ホテルの現在のおかみ、若林和子さん(81)は、先代のおかみから当時の話をよく聞きました。「体が不自由な子を見たことがなく、どうお世話すればよいか戸惑ったといっていました」

室内が傷だらけだったホテルは、終戦後まずには営業を再開

みどりの絵コンクール表彰式



第37回「みどりの絵コンクール」(三菱UFJ環境財団主催、日本ユネスコ協会連盟共催、環境省、日本ユネスコ国内委員会、毎日新聞社後援)の表彰式が8日、東京都内のホテルで開かれ、最優秀賞の9人に賞状や記念品が贈られました。

今回は全国から、2万8057点の応募がありました。

毎日新聞社賞を受賞した青森県の南部町立剣吉小2年、高橋憲矢君は、夏休みに家族で出かけたキャンプで、カニを釣った思い出を描きました。毎日小学生新聞賞の鹿児島市の池田学園池田小4年、野口愛夫さんは、屋久島キャンプで見た、緑に包まれたながめを描きました。

福島県三春町の「滝桜」を描いた作品で毎日新聞社賞を受賞した、千葉県市川市の日出学園小6年、安田智明君が入賞者を代表してあいさつ。「東日本大震災の復興の象徴である木を選びました。この絵を通じて、自然の生命力と、それを守る大切さを感じとってほしいと思います」と力強く話しました。

【西村隆】

ホテルを訪ねています。

開できませんでした。若林さんは「お客さんを取れない時期もありましたが、堅実にホテルを守ってこられましたと話します。疎開経験者や関係者は、今もホテルを訪ねています。

同校元教諭の松本昌介さん(76)は、「戦争当時最も弱い立場だった障がい児と、その子たちを守った人の努力を語り継ぎたい」と講演会をしめくくりました。

—おわり

毎日小学生新聞賞の表彰状を受け取る野口愛夫さん(東京都千代田区のホテルグランドパレス) 2012年12月8日 西村隆写真